

Title	大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向：藤沢・江ノ島・鎌倉との関連で
Sub Title	Oyama temple and shrine visits in the early modern period analyzed in relation to Fujisawa, Enoshima and Kamakura
Author	原, 淳一郎(Hara, Junichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.2 (2001. 2) ,p.1(149)- 22(170)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010200-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010200-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向

——藤沢・江ノ島・鎌倉との関連で——

原 淳一郎

はじめに

近世期の参詣旅行を語る際、欠かすことのできない要素として、いくつかの名所をセット化する傾向があったことを挙げるべきであろう。伊勢詣りと一口に言っても、参詣者の多くは伊勢参宮のみで帰宅することはほとんどなく、その途次には、熊野・高野山・金毘羅・善光寺などへも立ち寄っていた。相州大山詣りもその例外ではなく、旅日記類には富士山・道了尊・江ノ島・鎌倉・金沢などへ掛け越す例が数多く見受けられる。それゆえ、本稿で扱う江ノ島および藤沢宿周辺地域の発展に、大山参詣者の動向が深く関わっていたと言うことができるだろう。大山詣りの道中案内記である『相州大山順路の記』（寛政元年）は、序文で「大山参詣必携の書也」と

述べつつも、大山の五頁に対し、江の島に五頁、鎌倉・金沢に至っては合わせて三十一頁も割かれており、大山参詣後、江の島・鎌倉・金沢へと周遊するのが当然との認識であったことが窺える。

従来の両所に関する先行研究では、大山参詣者をめぐるいくつかの争論の事例が紹介されるのみであり、両所の結び付きが語られるものの、特に検討が加えられたことがなかった。また大山参詣者についても、十七世紀段階の武士・上層町人の個人的参詣から十八世紀以降の講による集団参詣又は代参講への参詣形態の変化という把握以上の時間的検討はなされていない。そこで本稿では、藤沢周辺地域において大山参詣者をめぐる生じた争論を扱いながら、十七世紀後半より十九世紀中期までの相模国内における大山参詣者の動向を検討したい。

一、四谷通り大山路と大山関連文芸作品

大山と江ノ島・藤沢地域を結びつける要因は、地理的關係にあることは明らかである。江戸から大山へ向かう場合、主に次の四通りの道が挙げられる。<sup>2)</sup> まず北から、甲州街道を通り府中から左に折れる府中通り、次に矢倉沢往還を通る青山通り、程ヶ谷と戸塚の間に位置する柏尾から右に折れ、長後を通る柏尾通り、そして藤沢より一里先の四谷から右に折れる四谷通りの四本である。

四通りのうち、『富士山道知留辺』<sup>3)</sup> (万延元年) 中の「富士大山路中案内図」に挙げられているのは、青山通り、四谷通りの二本である。『鎌倉江ノ島大山新板往来雙六』<sup>4)</sup> (天保年間) において、双六のコースとなつてゐるのは、往路が四谷通りで、帰路が青山通りとなつてゐる。また『相州大山参詣独案内の道の記』<sup>5)</sup>、『東海道神奈川台町休泊御定宿』<sup>6)</sup> では、柏尾通りと四谷通りの二本が紹介されている。

中でも特に四谷通りは、『雨降山乃記』<sup>7)</sup> (寛政三年)、『月園翁旅日記上、雨降山の日記』<sup>8)</sup> (天保六年) などの紀行文に限らず、名所案内記の『相州大山順路之記』<sup>9)</sup> (寛政元年刊)、浮世絵の『大山路中張交図絵』<sup>10)</sup> (安政五年)、滑稽本の『大山廻富士詣』<sup>11)</sup> (文政五年刊)、『箱根山七温

泉江之島鎌倉廻金草鞋廿三編』<sup>12)</sup> (天保三年)、『大山路中膝栗毛』<sup>13)</sup> (安政四年刊)、『滑稽富士詣』<sup>14)</sup> (万延一文久年間刊) など、大山に関する文学作品は軒並み四谷通りを題材としている。当然、日記・紀行文を書き残す知識層、文学作品を創作する戯作者には、東海道を折れ、江ノ島・鎌倉・金沢を廻るコースは、最高の材料であつたという点は否めない。故に必ずしも大山参詣の全体像を表しているとは言えないが、物見遊山的な観点から見れば、四谷通り大山路が最も魅力的な道であつたことは、これらの文学作品から明白である。それは、『大山路中膝栗毛』<sup>15)</sup> (安政四年刊) の次の一節からも分かる。

弥「コウきだ八、こここのしゆく(程ヶ谷)から大山へわかれるのがよつほどとくだけれど、わづかのたびだからばんにふぢさはへとまつて四ツ谷からわかれて大山へはいらうじゃあねへか」。

きた「さうさ、もう一ちばんどうらくをするつもりでとまるへい」

(傍線筆者)

とあるように、程ヶ谷・戸塚宿間に位置する柏尾通りを利用して「とく」するよりも、藤沢宿でのもう一晚「どらく」を楽しむことが、大山詣りのような「わづかの

たび」では参詣者を魅き付けけるものであったことが分かる。右に紹介した文芸作品のほとんどは十九世紀に生まれたものであり、いずれも共通して四谷通りを距離は遠いが魅力的なコースとして認識していたことを示している。

## 二、大山参詣者による江ノ島・藤沢地域のセット状況

次に、実際に大山へ訪れた旅人の手による旅日記から、四谷通りの利用された例、江ノ島とセット化された例を見ていきたい。表中の旅日記二十九点は、いずれも大山参詣を行っているものであり、このうち藤沢を通過しているのが二十五点、そのうち江ノ島へ訪れているのが十八点ある。しかしながら、旅の目的によって差が生ずると思われるので、表では、旅の目的別に四つに分類した。それでは分類ごとに検討してみよう。

大山参詣を主目的としている、又は大山が主目的地の一つである旅日記八点のうち、藤沢を通ったのが七点、そのうち江ノ島を訪れたのは五点であり、五点のいずれもが帰路に大山↓江ノ島というルートを利用している。江ノ島を訪れていない二点について見てみよう。『雨降山乃記』<sup>(16)</sup>の筆者坂本栄昌は、他にも紀行文を書き残した

江戸の文人であり、この時は大山参詣にしか興味がなかったようだが、四谷通りを利用して大山参詣を行っている。また『雨降山の日記』<sup>(17)</sup>の筆者源真澄は、江ノ島へは立ち寄っていないものの、鎌倉・金沢などを周遊した後、四ツ谷より大山参りをしている。この二点に共通するのは、往路に東海道を上り、藤沢・江ノ島近隣地域を周遊した後、四ツ谷より大山参りを敢行し、あっさりと家路につく印象を与える点である。これは筆者の二人が一回性の強い旅をしているからであろう。おそらく他にも数多くの名所を訪れているであろう二人にとって、江ノ島はすでに別の機会において参詣を済ました場所であり、大山参りが旅の最大の目的であったことが容易に推測される。それゆえ江ノ島を訪れた五点の旅日記とは区別され得るだろう。そこでこの五点について重要なことは、従来先行研究等では言われてきた、大山参り後の「精進落し」という形での、江ノ島への掛け越しが、実際はどうであったのかという点である。大山参詣後江ノ島へ訪れたのは、寛政元年（一七八九）の『富士・大田道中記』<sup>(18)</sup>が最初である。ただし、これは坂東観音霊場巡礼と兼ねた旅であるため、必然的に江ノ島、鎌倉へも訪れることになり、<sup>(19)</sup>「精進落し」の意味合いの有無は判然とし

ない。とすれば、天保九年（一八三八）の『富士大山大道中雑記』<sup>(20)</sup>ということになるのであるが、純粹に大山のみへ参詣した後、藤沢、江ノ島へ訪れたということでは、天保十五年（一八四四）の『大山より江之嶋鎌倉金沢日記』<sup>(21)</sup>がその最初である。この後『大山参詣并小遣帳』<sup>(22)</sup>『大山江ノ島日記帳』<sup>(23)</sup>などが同様に、江ノ島及び藤沢を「精進落し」の場として利用している。庶民の間で旅日記が頻繁に書かれるようになる時期とも関係するが、旅日記上では、天保期頃に大山と江ノ島を表題中に明記した旅日記が生まれており、それ以前に江ノ島での「精進落し」が定着していたことが窺われる。

富士参詣が主であった表中の六点の旅日記のうち、藤沢を経たのが四点、うち江ノ島へ訪れたのは二点である。『富士日記』<sup>(24)</sup>の筆者池川春水は、安房国和田村の医師であり、船で野島へ渡ったことを考えると、鎌倉・江ノ島を通じて大山へ参詣するのは当然であろうし、安房、上総から船で江戸湾を横断する人々には同様な傾向が見られる。<sup>(25)</sup>また春水は、純粹に登山を楽しむという極めて現代的な登山を行っており、全く「精進落し」のような民俗的意義には関心がなかったと考えられる。上総国奈良輪の鳥飼弥参郎も、神奈川に渡った後、江ノ島を訪れて

はいないものの、藤沢から四谷通りを通っており、船を利用する安房国、上総国からの参詣者は、江ノ島、藤沢に立ち寄り、四谷通りより大山、富士山へ参詣するのが一般的であったことが確認できる。

表二中でもう一人江ノ島へ掛け越しているのが、『富士禅定道中日記』<sup>(26)</sup>の鈴木松蔵であり、常陸国諸川新田からの旅人である。また下総国大谷口村からの『富士山道中日記覚』<sup>(27)</sup>は、江ノ島に寄っていないが、四谷通りを利用して藤沢に出ており、富士を主目的とした場合、大山参詣後江ノ島へ立ち寄るのは、常陸国、下総国など江戸を通らなければならぬ人々だけであったと言える。重兵衛や猿渡盛章など武蔵国西部より甲州街道を通じて富士参詣した人々は、たとえ大山へ寄っても、その後すぐに厚木より八王子や府中など北方へ向かい、帰宅していた。

大山と江ノ島をセット化する旅人の中には、当然の事ながら、江ノ島・鎌倉を主目的として訪れ、その後大山へ参詣するという人々も存在した。このパターンの旅は、主に江戸の文人、知識人層によって行われていたと考えられる。また表四中に坂東観音霊場を行っている例が三つあり、その全てが藤沢、江ノ島を訪れている。これは

表1 大山参詣を主目的又は大山が主目的地の一つである場合

題名	筆者	年代		行程	
富士大山道中記	与兵衛	寛政元年6月	○	武蔵国本宿村-御嶽山-吉田-富士山-須走-道了尊-大山-藤沢-江ノ島-鎌倉-江戸-本宿村	坂東観音霊場巡礼、 富士山大山参詣
雨降山乃記	坂本栄昌	寛政3年7月	△	江戸-藤沢-大山-伊勢原-神奈川-江戸	大山参詣
富士山大山道中日記	岡田常五郎	天保2年7月	×	武蔵国本宿村-吉田-富士山-須走-大山-府中-本宿村	富士・大山参詣
雨降山の日記	源真澄	天保2年7月	△	江戸-程ヶ谷-金沢-浦賀-金沢-鎌倉-藤沢-大山-戸塚-江戸	大山参詣
富士大山道中雑記	(甲州府中近郊の村民)	天保9年6月	○	甲斐国府中-吉田-富士山-須走-道了尊-大山-江ノ島-鎌倉-藤沢-八王子-府中	
大山より江之嶋鎌倉金沢日記	不明	天保15年7月	○	相模国雨坪村-蓑毛-大山-藤沢-江ノ島-鎌倉-金沢-鎌倉-藤沢-平塚-(雨坪村)	
大山参詣并小遣帳	不明	嘉永元年6月	○	武蔵国鈴谷村-府中-厚木-大山-藤沢-江ノ島-藤沢-江戸-浦和-鈴谷村	
大山江ノ島日記帳	岡田門五郎	嘉永2年6月	○	藤-府中-小野路-厚木-大山-藤沢-江ノ島-鎌倉-金沢-程ヶ谷-駒込-蕨	大山への初山参り

表2 富士参詣を主目的

題名	筆者	年代		行程	
富士日記	池川春水	明和5年6月	○	安房国和田村-上総百首-野島-鎌倉-腰越-江ノ島-藤沢-大山-矢倉沢-須走-富士山-吉田-大月-江戸-和田村	
富士禅定道中日記	鈴木松蔵	文政11年6月	○	常陸国諸川新田-八王子-吉田-富士山-須走-道了尊-大山-藤沢-江ノ島-鎌倉-江戸-諸川新田	富士登山
御用留	重兵衛	文政12年7月	×	福生-吉田-富士山-須走-道了尊-大山-橋本-福生	富士登山
なまよみの日記	猿渡盛章	天保3年6月	×	府中-高尾山-吉田-富士山-吉田-籠坂峠-須走-道了尊-大山-厚木-小野路-府中	
富士山日記(抄)	(鳥飼弥参郎)	(天保9年)7月	△	上総国奈良輪-神奈川-藤沢-大山-関本-道了尊-須走-籠坂峠-吉田-(不明)	天候不良のため富士登山断念
富士山道中日記覚帳	友治郎	嘉永6年7月	△	下総国大谷口村-江戸-高尾山-吉田-富士山-須走-大山-藤沢-川崎大師-江戸-(大谷口村)	富士参詣

表3 江ノ島、鎌倉を主目的

題名	筆者	年代		行程	
鎌倉記	自住軒一器子	延宝8年4月	○	江戸-金沢-鎌倉-江ノ島-藤沢-大山-藤沢-江戸	
江の島の記	菊池民子	文化11年4月	○	江戸-川崎大師-神奈川-金沢-鎌倉-江ノ島-藤沢-伊勢原-大山-厚木-神奈川-江戸	
東海紀行	小田切日新	安政6年8月	○	(不明)-金沢-鎌倉-江ノ島-藤沢-平塚-(大山)	

表4 廻国巡礼、伊勢参り、西国遊覧、坂東巡礼を主目的

題名	筆者	年代		行程	
坂東巡礼湯殿山道中記	奥富万太郎	享保7年6月	○	武蔵国越生-高崎-足利-日光-米沢-山形-羽黒山-月山-湯殿山-山形-福島-木更津-神奈川-鎌倉-江ノ島-藤沢-飯泉観音-大山-江戸-越生	出羽三山参詣、坂東観音霊場巡礼
西国道中記	岡崎藤七	天明1年5月	○	常陸国下小瀬村-鹿島-成田-江戸-戸塚-鎌倉-江ノ島-藤沢-大山-小田原-箱根-須走-富士山-大宮-秋葉山-鳳来寺-名古屋-伊勢-熊野-高野山-大坂-吉野-奈良-京都-姫路-宮津-善光寺-日光-下小瀬村	
道中記	杉沼彦左エ門	享和4年1月	○	寒河江-山形-福島-宇都宮-江戸-戸塚-鎌倉-江ノ島-藤沢-大山-小田原-箱根-秋葉山-鳳来寺-名古屋-伊勢-熊野-大坂-奈良-近江-京都-金毘羅-姫路-福知山-宮津-京都-高野山-(不明)	
日本九峰巡礼日記	野田成亮	文化14年5月	○	日向国佐土原……江戸-川崎-鎌倉-江ノ島-藤沢-寒川神社-日向薬師-大山-道了尊-小田原-鳴立沢-箱根……佐土原	
西国道中日記帳	朝見富三郎	文政10年閏6月	○	武蔵国屈巢村-蕨-江戸-川崎大師-戸塚-鎌倉-江ノ島-藤沢-大山-道了尊-須走-村山-久能山-秋葉山-伊勢-熊野-高野山-大坂-吉野-奈良-京都-金毘羅-岡山-姫路-宮津-善光寺-屈巢村	
道中日記	富士木伝兵衛	文政12年3月	△	下総国佐倉-江戸-高崎-榛名山-妙義山-戸隠山-善光寺-名古屋-伊勢-奈良-吉野-高野山-大坂-金毘羅-巖島-姫路-大坂	

坂東道中記	不明	天保12年2月	○	一京一鳳来寺一秋葉山一久能山一箱根一大山一藤沢一川崎大師一(不明)	坂東観音霊場巡礼
道中日記帳	篠崎	弘化2年6月	×	武蔵本太村一府中一厚木一日向薬師一一の沢一大山一蓑毛一飯泉一藤沢一江ノ島一鎌倉一程ヶ谷一江戸一(不明)	伊勢参宮
道中日記帳	久保田太三郎	嘉永2年7月	○	武蔵国上平野村一江戸一柏尾一大山一道の尊一富士山一秋葉山一伊勢一高野山一大坂一吉野一奈良一京都一金毘羅一姫路一宮津一善光寺一上平野村	
御伴 道中日記	重右衛門	嘉永5年6月	△	武蔵国柏原村一八王子一厚木一日向薬師一大山一蓑毛一飯泉一藤沢一江ノ島一鎌倉一三浦一鎌倉一程ヶ谷一(不明)	
(略道中記) *	榛白弥十郎	安政6年5月	○	上総国奈良輪一神奈川一藤沢一大山一蓑毛一道の尊一関本一須走一富士一村山一久能山一秋葉山一鳳来寺山一名古屋一桑名一(不明)	6月27日大山参詣
参宮拝礼帳	菅谷弥七	文久2年6月	△	佐渡国坊ヶ崎村一新潟一昔谷不動一鳥海山一羽黒山一湯殿山一山寺一塩竈神社一日光一江戸一程ヶ谷一鎌倉一江ノ島一藤沢一大山一高崎一新潟一坊ヶ崎村	伊勢参宮

\*表紙には、「越後国昔谷不動明王様ニ始段々下ハ出羽奥州御山々上ハ相模国大山町石尊様迄参詣見物夫より三国越へ仕候而越後新潟へ罷下り略道中記」という記載がある。  
(註) 江ノ島、藤沢両方へ掛け越している場合には○、藤沢のみに訪れている場合には△、いずれにも訪れていない場合には×を記した。

大山、江ノ島の近くにそれぞれ霊場が存在していること といった傾向は見られない。  
から、霊場巡りの途中で立ち寄ったものと考えられる。 ここで時間的把握をしておこう。十八世紀半ば過ぎまで、文人らが鎌倉・江ノ島遊覧のついでに大山を訪れるか、もしくは伊勢参宮・坂東観音霊場巡礼の途中で両点が江ノ島を経ているが、旅の途次に位置する名所を随所に立ち寄るのが一般的であったことが分かる。この時意に選択したものであり、特に両所を意識的に参詣するまでは、大山或は富士を主目的とした参詣者が藤沢・江



ノ島へも訪れること自体が僅かで、「精進落し」の意味合いが冠されるには至らなかつたと考えられる。また出発地から考えると、富士を主目的とした場合、船で江戸湾を渡海する上総国、安房国の住人は、金沢・鎌倉↓江ノ島↓藤沢↓大山というルートをとる、帰路に江戸を通しなければならぬ常陸国、下総国の住人は、富士参詣と大山参詣のいずれに重きを置こうとも、帰路に大山↓藤沢↓(江ノ島)↓江戸というルートをとる、藤沢・江ノ島で「精進落し」を行っていた。しかし大山を主目的とした場合には、武蔵国北部・西部の住人でも、大山より直に北へ向かわず、江ノ島・藤沢・江戸等を経て、やや遠回りであつた例がいくつも見られる。

### 三、十七世紀後半の大山と江ノ島

つぎに、十七世紀後半における大山参詣者の動向を、大山と江ノ島・鎌倉との対比の中で探つていこう。『鎌倉記』の筆者自住軒一器子は、延宝八年(一六八〇)四月鎌倉探訪の旅へ出掛けたが、その際江ノ島・大山へも訪れ、日記中に大山と鎌倉を比較した極めて興味深い記述をしている。

四月十三日の暁に江戸を出た筆者一行四人は、程土ヶ

谷より左に折れ、金沢から鎌倉に入った。梶原屋敷の跡より雪の下までは、野と島ばかりで雪の下まで一軒も家が無く、同じく頼朝の御屋形跡は「五六町四方明地の田地」であつた。また材木座より雪の下への帰路、村人が銘々鎌や長刀、棒・熊手を手に猪を追い回す光景に出会うなど、建長寺の金堂を初めとした各名刹の建築物、宝物についてはその素晴らしさを書き記しているが、総じて鎌倉の寂れた姿を書き残している。後に至る所で見られるようになる旅人目当ての商売も、この時点ではほとんど見られない。

十五日は、再度鶴岡八幡宮に参詣した後江ノ島を訪れた。江の島は、鎌倉に比べると参詣者の受入態勢が整つており、既に参詣者を対象とした客商売が行われていた。島は「打ちならびて家居也」という様相であり、旅人は「爰に旅装束を預けてあないするものをつれてゆく」とができた。岩屋弁財天の洞窟付近では、「こゝにて所のあまに鮑とらせてみるわざ中、えもいはぬながめ也」とあるように、後の旅日記に度々書き留められる海女の鮑取りを觀賞している。

その日は四ツ谷より大山街道に入り、田村に宿つた。

翌十六日には大山に到着し、大山町の風景を「麓二十町

程両方すきと市棚にて中にぎは、し」と述べ、「宿りを取り雨具を預け、扱山へおもむ」<sup>(33)</sup> いている。難所を登り、本堂にようやく辿り着いたが、「本堂のかゝりえもいはぬ莊嚴にて、江戸浅草観音堂よりは少ちいさくおもふり似たり。絵馬数おほく光かゞやく」と、<sup>(34)</sup> 本堂の莊嚴さに驚き、「則堂のおもてに左大臣家光御建立とあれば、此御作りも近き程の事なれば、みやびやかなるも理り也」と一応は納得している。しかし、「いつの比より靈<sup>(35)</sup> 仏地をしめ給ふ」<sup>(36)</sup> のか判然としない大山が、多くの人で賑いを見せていることに疑問を感じ、鎌倉と対比させながら次のように述べている。<sup>(37)</sup>

大山伝記本朝の書籍の中にしかとしたる伝記はいまだ見あたり侍らず。是に付て思ふに、仏に有縁無縁有と見えたり。先鎌倉は武家の天下に成りし始の地なれば將軍を柳營と申により、そのまします所なれば柳の都といふ。是天子は花の都にいますとのさかへをあはせてよぶ名成べし。代々の祈願所・廟所とて宮も寺も数おほく、伝記さだかにして、靈仏おほけれども、雪の下こそ人あしもしげく、にぎは、しけれ、その外はよのつねの田舎よりもさびたり。又鶴が岡八幡宮・長谷観音・建長寺・光明寺の外は皆

おとろへて人けすごく、只田畠山谷よりこと物は見えず。

と鎌倉の様子について触れ、続いて大山に筆を走らせている。<sup>(38)</sup>

然に此大山は伝記もさだかならず、前代開帳もなく、鎌倉は平地に少坂のある程なるが、爰は麓の里も岡つゞきにして、山上へのぼる十八町は、遠国はしらず近きあたりにはたとへなく、箱根・熱海の嶮難も及がたくみゆる程なる岩坂に、石の上には人の足跡にてくぼみ、木の根は人の手かたにて木賊をかけてみが、れたるやうになる迄、貴賤の参詣しげくして、日も雨ふり道さかしきに上下の人ひきもきらず。さらば一旦のはやり仏はかならずさむる約あるも、いつも同じやうにさかへて、山下の民家も五十余町が程は田畠もつくらず、時参詣の人あしを頼みて、所の者は都のつとにするわりご・引もの、類をこしらへあきなひ、扱は祈禱をする御師の宿ばかりにて、軒をならべ地をあらそひ、<sup>(39)</sup> せまき内に人のこけりあふ事、江戸にもまさりて磐昌す。もとより藤沢より六七里のあいだは東海道よりも人馬の足しげく、しかとしたる国を知り給ふ大名の城下よりもにぎく

し。只是不動明王の誓願むなしからざるきとくにより、只一所の御影にて、多くの民のなりはひ、又万民ねがひを叶ふる御威光、よそにて聞しよりも猶たうとし。

（傍線筆者）

とあり、鎌倉は、かつて武家の都であり、由緒正しい寺社が無数に存在する土地であるにもかかわらず、雪の下周辺と鶴岡八幡宮などの名所寺社内を除くと田畑山谷ばかりで、人気もほとんどなく寂れていた。これに対し、大山は、縁起も定かでないのに貴賤を問わず参詣者が多く訪れ、ましてや当日は雨で道が危険であるのに登拝者が連なる状況であった。門前町では、参詣者を対象として割子や挽物などを作って売る民家や、御師の家が軒を並べ、狭いながらも混み合っていた。この記述は、もちろんやや誇張された表現であることは否めないが、如実に延宝頃の大山の繁栄を物語っているものである。またこの時点での大山は、『鎌倉記』の筆者自住軒らの江戸の文人に訴えかけるだけの威厳を持っていなかったことも分かる。自住軒に同行した一人が、大山の縁起を知っており自住軒に教える場面もあるが、大山は名のみで未だ江戸では縁起や利益が十分に浸透しておらず、江戸からの参詣者は些少であったと考えられる。

このことから、江ノ島・大山は信仰対象地であるが故に、十七世紀段階から一般庶民の参詣も行われており、参詣者を受け入れる態勢が整っていたと言える。江ノ島は、近世中期以降には霊地でありながら、その遊興性において名高い名所となるが、この段階で「近世的名所化」への転換が進んでいた。また大山は、十八世紀に入ってから講による組織的な参詣が盛んに行われるようになるが、それ以前にも江戸以外から多くの個人的参詣者を集めていたと考えられる。これに対して鎌倉は、鎌倉の歴史や寺社の由緒に関する知識を有する自住軒ら知識人層がもっぱら訪れる地であった。つまり十七世紀中は、大山・江ノ島・鎌倉は別々の参詣者又は旅人を受け入れており、鎌倉を主目的としていた旅人の内、自住軒のように一部の人々が江ノ島、さらには大山へも足を伸ばしていたのであろう。

#### 四、柏尾通り一件と江ノ島遊覧

ここで、安永七年（一七七八）に起きた藤沢宿・戸塚宿と柏尾村との争論を見てみたい。次の史料は、天保十一年（一八四〇）に、大住郡戸田村の名主八郎右衛門が、鎌倉郡下柏尾村名主与兵衛に出した書状の一部であり、

安永七年（一七七八）に戸塚宿・藤沢宿伝馬惣代二名、  
両宿問屋年寄惣代一名、柏尾村外十九か村の名主・組頭  
の連名で道中奉行所へ差し出された一札書を写したものである。<sup>39)</sup>

### 差上申一札之事

相州大山寺不動石尊江往来ハ、藤沢戸塚両宿之間四  
ツ谷村より市之宮村伊勢原村子安村通り古来之道筋  
ニ而、延宝四年与記候大山道之石牌有之候処、近年  
保土ヶ谷宿両宿之間下柏尾村より参詣人多分往来い  
たし、別而六月下旬より七月中旬迄参詣多ク、助郷  
并外村人馬共柏尾道右参詣人馬相對雇ニ罷出、宿方  
諸往来込合之節、人馬寄セ間ニ合兼候間、古来より  
之四ツ谷道重々往来致、柏尾道参詣人馬駕籠等通路  
無之様仕度候間、藤沢戸塚両宿奉願候ニ付、右道筋  
最寄村々御吟味之處、下柏尾村より大山通路之場所  
右村夫より下長後戸田下粕屋上粕谷子安六ヶ村領之  
大山道在より之程土ヶ谷神奈川江戸邊江之往還ニ而  
村道二者無之、殊ニ柏尾下長後両村ニ寛文十年与記  
候大山道之石牌有之、却而四ツ谷道より古、格別往  
来相増候儀者無之段、一ノ宮村之者申之、其外村々  
申口ニ茂府合いたし、助郷人馬宿方往来ニ欠ヶ大山

大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向

参詣相對雇ヲ重々稼候儀無之段一同申之、宿場往来  
差支も無之上者、藤沢戸塚両宿出訴之趣不被及御沙  
汰、最寄村々之もの共与大山参詣人被雇候共、此上  
助合人馬ハ勿論、宿方往来差支ニ不成様可致旨被仰  
渡、一同承知奉畏候、若シ相背候ハ、御科可被仰付  
候、仍而御請證文差上申所如件

江川太郎左衛門当分御預り所

東海道

戸塚宿

伝馬惣代

安永七戌年五月廿二日

伝兵衛

右伝兵衛煩ニ付

藤沢宿

右同断

定七

右両宿

問屋年寄惣代

藤沢宿

林右衛門

御吟味ニ付罷出候

下柏尾村

外拾九ヶ村

名 主

組 頭

松平庄右衛門知行所

相州鎌倉郡和泉村

名主 武左衛門

木村左門知行所

同所同郡上飯田村

名主 藤兵衛

遠藤平三郎知行所

高座郡千束村

名主 八左衛門

朝岡左京知行所

同郡下長後村

名主 吉左衛門

竹尾喜左衛門知行所

同郡土棚村

名主 山三郎

木村弥十郎知行所

同郡菖蒲沢村

名主 孫左衛門

天野山城守知行所

同郡用田村

名主 孫右衛門

神尾友之助知行所

同郡恩馬村

名主 全 七

松平孫太郎知行所

同郡一之宮村

名主 四郎左衛門

田沼主殿領分

大住郡戸田村

名主 権左衛門

平岩龜五郎知行所

高座郡猪郷村

名主 幸左衛門

長谷川太郎兵衛知行所

同郡門沢橋村

名主 平兵衛

加藤富之助

大住郡吉際村

組頭 惣左衛門

竹本又八郎知行所

同郡落合村

名主 清蔵

中川市左衛門知行所

同郡粕谷村

名主 善六

竹尾内膳知行所

同郡子安村

名主 嘉兵衛

村上内記知行所

鎌倉郡柏尾村

名主 五郎左衛門

黒田源右衛門知行所

同郡岡津村

名主 図書

石川宮次郎知行所

同郡上矢部村

名主 仁兵衛

石巻権左衛門知行所

同郡中田村

名主 伊兵衛

道中

御奉行所様

これによると、相州大山寺への往来は、四ツ谷道が古来よりの道筋であるところ、近年は下柏尾村からの柏尾道の往来が増加している。特に六月下旬より七月中旬までは参詣者が多いため、助郷村並びに他村の人馬が柏尾道での参詣人の相対雇に取られ、宿方に支障が生じている。そこで、参詣人などが柏尾道でなく四ツ谷道を通行するようにしたいと藤沢・戸塚両宿が願ひ出ている。これに対し、柏尾道筋の村々より、柏尾道は単なる村道ではなく江戸近辺への往還であり、石碑の寛文十年との銘も四ツ谷道の石碑の延宝四年との銘よりも却って古い。また往来が格別多いということもなく、大山参詣者の相対雇ばかりで稼いでいるわけでもないとの反論があった。このため、宿場往来に特に差し支えもないので、御沙汰には及ばず、最寄りの村々は大山参詣人に雇われたとしても、助郷は勿論のこと、宿方往来に支障がないようにすべき旨が仰せ渡されている。

史料中の「近年保土ヶ谷宿両宿之間下柏尾村より参詣人多分往来いたし別而六月下旬より七月中旬迄参詣多ク助郷并外村人馬共柏尾道右参詣人馬相対雇ニ罷出宿方諸

往来込合之節人馬寄せ間ニ合兼候而」との文言は、大山参詣者の構成状況の変化を示している。十七世紀段階では、江戸からは僅かに上層町人、知識人などが参詣するのみであり、四ツ谷通りを利用して来た。十八世紀に入ると、講を形成するなどして、次第に一般庶民の参詣も増え、最も近道である青山通りを主に通行していたと考えられる。史料にあるように、安永期に至って柏尾通りの往来が繁くなつたということは、庶民が参詣旅行中に遊興性を付随させ始めた一つの兆候である。つまり柏尾通りは、復路も柏尾通りを利用するというよりも、むしろ四ツ谷通りから藤沢、江ノ島、鎌倉そして金沢などを遊覧することを視野に入れた道である。また程ヶ谷までは東海道中であることも魅力的であつたと考えられる。

江ノ島と、半ば江ノ島の門前町的な役割を果たしていた藤沢宿は、大山詣の人々によって「精進落し」の場所として利用されていた。<sup>(40)</sup> 旅籠屋、茶屋のみならず、遊女屋にとつても、大山の夏山季は書き入れ時であり、①「こわいものなし藤沢へ出ると買い」②「藤沢の女郎拔身の客をとり」③「大天狗様が藤沢の大紋日」<sup>(43)</sup>などの川柳が残されている。ここで重要なことは、これらの川柳が作られた時期だが、①は「誹風柳多留十四編」に収録

され、安永八年（一七七九）前後の句と思われ、②は安永八年（一七七九）、③は天明五年（一七八五）の句であり、時期は柏尾通り一件と重なる。この藤沢での遊女を買う行為が川柳に詠まれるようになった安永・天明期（一七七二―八九）は、一般の大山参詣者が、大山だけでなく、江ノ島・鎌倉・金沢へも足を向け始め、藤沢宿及び江ノ島における「精進落し」の習慣が広まりつゝあつた時期である。そして寛政期（一七八九―一八〇一）に至って、本稿の冒頭で述べた『相州大山順路の記』（寛政元年）のように、江ノ島・鎌倉・金沢への周遊を前提とした案内記が出されたのであろう。

#### 五、四ツ谷茶屋をめぐる争論

四ツ谷通り大山道を、大山参詣者が頻繁に利用することで、藤沢宿周辺や、大山道近隣の村々にも数々の影響をもたらしした。

大山は、旧暦六月二十七日より七月十七日まで二十一日間夏山の祭礼が執り行われ、本堂（不動堂）脇の山頂への登山口が開かれ、本宮（石尊宮）の開帳が催された。この時期は、『滑稽富士詣』<sup>(44)</sup>（万延・文久年間刊）に、

奥の院石尊大権現の社ハ本堂より廿八町祭神大山祇

命神躰ハ石にして女人結界なりつねにハ諸人の参詣を禁ずといへとも毎年六月廿七日より七月十七日まで登山ゆるすに江戸及び遠国近郷の詣人群参する事おびたゞしく道中筋のにぎハひ他方の人の目をおどろかし。

(傍線筆者)

とあるように、多くの参詣者で賑った。当然のことながら、街道筋においても、近隣の村人によって、旅人を目的とした諸々の農間余業が営まれた。東海道と四ツ谷通り大山道の追分にあたる四ツ谷も例外ではなく、臨時の商売として茶屋を出す人もいた。次の史料は、高座郡羽鳥村平左衛門が、同村名主八郎右衛門へ出した借家証文である。<sup>(45)</sup>

### 借家申証文之事

#### 一、居宅壺軒裏座敷付

但シ戸障子疊其外道具共ニ

右者貴殿御所持之店ニ御座候處、我等勝手ニ付当六月七月晦日迄大山参詣之旅人江茶屋渡世仕度ニ付、貴殿江相願借屋申候処実正ニ御座候、家賃之義者壺ケ月ニ付、金壺歩宛之積りを以金弐分晦日限り相納可申候、尤明ケ渡シ候節、右之品々少も紛失無之、七月晦日限り明ケ渡し可申候、万一家賃相滞候歟、

大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向

又者戸障子疊其外諸道具類紛失致し候ハ、証人者相弁立会急度相渡し可申候、為後日五人組証印仍而如件、

文政八酉年六月

店借り主 平左衛門印

五人組惣代

證人 定 七印

八郎右衛門殿

史料によれば、平左衛門は、大山参詣の旅人相手の茶屋を出店するため、名主の八郎右衛門より借家をした。六月より七月晦日まで約二か月間、一か月に付き金一分で、二か月分二分の家賃を支払うことが約されている。平左衛門が借りた居宅は、史料中に「貴殿所持之店」と記されていることから、恒常的に茶屋などの商売のために貸し出されていたと考えられ、八郎右衛門は大山の夏山祭礼中に、他にも所有する建物を農間余業をする農民に貸し出していたことが推測される。平左衛門は、次に紹介する四ツ谷一件にも関係するなど、毎年のように茶屋を営んでいたようで、他にも茶屋出店の資金調達のため、八郎右衛門より金子を借用する史料が見える。

文政十二年(一八二九)には、四ツ谷追分の沿道に位



置する茶屋と藤沢宿の間で、旅人の宿泊をめぐって争いが行われた。次の史料は、辻堂村久兵衛外十三名が大山詣の旅人などを止宿させるために宿方が難儀しているとして、藤沢宿本陣脇本陣惣代脇本陣喜兵衛、宿役人惣代年寄仁兵衛が止宿差止の訴訟を起こした際の濟口証文である。<sup>(46)</sup>

四ツ谷一件書上之写

差上申一札之事

東海道藤澤宿本陣脇本陣惣代脇本陣喜兵衛宿役人惣代年寄仁兵衛の相州辻堂村久兵衛外拾三人を相手取、宿間村々ニ而猥ニ旅人休泊等為致間敷段、前々御触茂有之候義之処、大山参詣之旅人等を止宿為致、宿方難義おもひ候二付、御差止之儀申立候一件之義、相手方之者共召出御吟味中ニ御座候処、今般相對之上、大山参詣之旅人ニ限り、来ル寅年の来ル申年迄七ケ年之内、毎年六月廿七日の大ノ月者七月朔日迄、小ノ月者七月二日迄日数五日之間、宿方旅籠屋共方ニ定宿無之分者相手拾四人之者共方江も止宿為致候筈、宿方ニ而厚勘弁致し、尤右年限日数之内たり共、右参詣人外之旅人宿引受候義者勿論、宿引躰もの差出猥ニ稼方等不致、宿方差障ニ不相成様年限中不実

之義も無之年限相立候節、相手方より実意を以遂行之、其砌宿方ニ而も不実之義無之様勘弁之上取計遣候積、且辻堂村作場道を近道之由ニ申勧案内致候もの有之節者、訴答申合相手方にて差止、都而宿方差障ニ不相成様実意専一ニ心掛取計候筈取極、一同無申分御吟味下之儀連印書付を以奉願上候処、願之通御下ケ被成下候段被 仰渡、一同承知奉畏候、仍而御請證文差上申処如件

中村八太夫当分御領所

東海道藤沢宿

本陣

脇本陣惣代

脇本陣

文政十二丑年八月廿三日

訴訟人方 喜兵衛

宿役人惣代

年寄 仁兵衛

小笠原勝三郎地行所 相州高座郡折戸村

百姓平五郎外九□□代兼

同知行所同郡羽鳥村 相手方百姓 平左衛門

諏訪部喜右衛門知行所 同郡大庭村 同清五郎

諏訪部帯刀知行所 同郡同村 同太吉

江川太郎左衛門代官所 同郡辻堂村 同久兵衛

道中

御奉行所

右の史料によると、宿方旅籠屋に定宿のない大山参詣の旅人に限り、文政十三年（一八三〇）より天保七年（一八三六）まで七年の内、毎年六月二十七日より大の月は七月朔日、小の月は七月二日まで日数五日の間、十四名の方へも止宿が許されることとなった。また「前々御触茂有之候義之処」との記載があることから、以前から両者の間で問題となっていたことも分かる。この争論に關しては、次のような史料も残されている。<sup>(47)</sup>

借用申金子之事

一 金拾兩也

右者当子年四ツ谷茶屋共相手取出訴仕候処、右入用差支候付借用申処実正也、返済之儀者、来丑年出入相済次第、壹割五歩之利分を加へ、急度返済可仕候、為後日入置申金子借用一札、仍而如件

文政十一年十二月

坂戸町

旅籠屋惣代

七郎右衛門

大山参詣をめぐる社寺参詣者の動向

九左衛門

松 兵 衛

問屋

新蔵殿

(傍線筆者)

これは、藤沢宿坂戸町の旅籠屋惣代七郎右衛門ら三名が、問屋新蔵から、四ツ谷茶屋との出入に際して、金子十兩を借用した証文である。ここで注目しておきたいのは、「四ツ谷茶屋」との文言であり、先の史料には後から「四ツ谷一件」との加筆があるものの、辻堂村久兵衛外十三名がどこで旅人を休泊させていたかは確証が得られなかったが、この史料で久兵衛らが四ツ谷で茶屋を営んでいたことが確認できた。また藤沢宿では「四ツ谷茶屋」と俗称していたことも知られる。なお藤沢宿が訴したのとは文政十一年（一八二八）であることも分かった。

その後翌文政十三年（一八三〇）六月に、平左衛門外三名がこれから始まる大山の夏山祭礼に向けて、村役人へ差し出した一札が次の史料である。<sup>(48)</sup>

差上申一札之事

一、大山石尊宮御祭礼中旅人休泊之義二付、我等共相手取昨年中藤沢宿及出入、右出入濟口之砌、

一七 (一六五)

道中 御奉行所様被仰付候通り、六月廿七日の七月二日迄日数五日之間旅人泊り商売仕、右日数之外昼休之分ハ是迄之通り商売仕、泊り之義ハ平生者不申及、御祭礼中たり共決而いたし申間敷候、右之段兼而被仰付候通り急度相守可申様被仰付、承知奉畏候、依之一札差上申処如件、

文政十三寅年六月

金 六印

定 七印

傳 藏印

平左衛門印

村御役人中

藤沢宿が出入に及び、その結果道中奉行所より、先程見たように、六月二十七日より七月二日まで日数五日の間は旅人を泊めても良いが、その他の日は、昼休みの分はこれまで通り商売し、泊りの分は、平生は言うまでもなく御祭礼中といえども決してはいけなないと仰せ付けられている。道中奉行は、基本的には宿場である藤沢宿を保護する方針を採っている。しかし、期限付きとは言え、羽鳥村に旅人宿泊を認めており、大山街道沿いの村々の農間渡世の対象として、大山参詣者が重要であり、

無視できなかったことが分かる。文政八年(一八二五)の店借りの証文を含めて、文政期頃から四ツ谷での茶屋などの農間余業が活発化したと考えたい。

おわりに

以上、本稿では、江ノ島・藤沢周辺地域において起きた大山参詣者をめぐる争論を再検討し、大山のみならず江ノ島・鎌倉を含めた相模国内における参詣旅行を、できるだけ時間的且つ段階的に把握することに努めた。

十七世紀段階では、文人などの知識人層が、大山・江ノ島参詣を主目的とした旅を行うことは少なく、専ら鎌倉散策を目的としていた。これに対して大山・江ノ島は、主に一般庶民層の参詣者を受け入れて、既に賑いを見せていた。ただし、大山の参詣者は主に江戸以外からの人々であったと考えられる。また、大山を主目的とした参詣者が江ノ島・藤沢へ向かうこと自体が稀で、大山参詣後の「精進落し」という習慣は全くなかったと言っても過言ではない。この段階では、大山と江ノ島の両所を参詣するのは、鎌倉を主目的とした文人墨客が、旅のついでに江ノ島、さらには大山へと足をのぼす場合にほぼ限られていた。

十八世紀に入り、大山参りが江戸市中へも充分に浸透し、各地で講による集団参詣が行われるようになったが、十八世紀半ば過ぎまでは同様な状況であった。但し、鎌倉・江ノ島遊覧者に加えて、伊勢参宮者、坂東巡礼者はその途次に両所へ立ち寄る例も見られるようになった。変化が見られるのは安永期頃からであり、この段階より柏尾通りからの参詣者が増加し、庶民が江ノ島・鎌倉・金沢などを周遊することを視野に入れるという、遊興性を付随させた参詣旅行を始めた。文政期には、以前より争論の種となっていた四ツ谷茶屋での宿泊が、期限付きながら正式に認められるなど、大山詣りの旅人と周辺村々との交流が極めて深いものとなっていた。また江ノ島・藤沢などでの「精進落し」の慣習が定着したのもこの頃であり、天保期以降これを前提として大山・江ノ島の名を冠した旅日記が書かれたのであろう。

註

- (1) 西海賢二「相州大山講と養毛御師」(『立正史学』五七、一九八五年)、高野修「相模大山講と藤沢」(『藤沢市史研究』一九、一九八六年、のち圭室文雄編『大山信仰』《民衆宗教史叢書二》、雄山閣、一九九二年に所収)など。
- (2) 大山街道の基本的文献としては、まず『相模大山街

道』(大山阿夫利神社、一九八七年)、浅香幸雄「大山信仰登山集落の形成の基盤」(『東京教育大学地理学研究报告』六、一九六七年、前掲『大山信仰』所収)、根本行道『相模大山と古川柳』(東峰書房、一九六九年)などが挙げられる。また個別的には、紀行文を基に青山通り大山道中を再現した金子勤『大山道今昔』渡辺華山の「遊相日記」から(神奈川新聞社、一九八五年)、川崎市域の青山通りを丹念に追った川崎市立多摩図書館『大山街道二子から上有馬までを訪ねて』(一九七三年)、川崎市立高津図書館『写真で読む今昔・矢倉沢往還その1・2』(一九九〇年)、柏尾通り、四谷通りを紹介した阿部往寛『藤沢を通る大山道』(『藤沢市史』五、一九七四年)などがある。江戸湾内交通への関心から大山信仰の新たな側面を明らかにした安池尋幸「中世・近世における江戸内海渡船の展開」富津・野島間の渡船の場合(『神奈川県史研究』四九、一九八二年、のち前掲『大山信仰』所収)を初めとする諸論稿もあり、大山街道に関する先行研究は多い。

- (3) 「富士山道知留辺」(梅園松彦、万延元年刊)、東京国立博物館所蔵。
- (4) 「鎌倉江ノ島大山新板往来雙六」、神奈川県立金沢文庫所蔵。
- (5) 「相州大山参詣独案内の道の記」、国立国会図書館所蔵。
- (6) 「東海道神奈川台町休泊御定宿」、横浜市立歴史博物館所蔵。
- (7) 「雨降山乃記」(坂本栄昌、寛政三年)、宮内庁書陵部

所蔵。

- (8) 「月園翁旅日記上、雨降山の日記」(源真澄、天保六年)、国立国会図書館所蔵。
- (9) 前掲「相州大山順路之記」
- (10) 「大道中張交図絵」(安政五年)、神奈川県立博物館所蔵
- (11) 「大山廻富士詣」(十返舎一九、文政五年刊)、東京大学図書館所蔵。
- (12) 「箱根山七温泉江之島鎌倉廻金草鞋廿三編」(十返舎一九、天保三年刊)、『神奈川県郷土史料集成』一〇、神奈川県図書館協会、一九六九年
- (13) 「大道中膝栗毛」(仮名垣魯文、安政四年刊)(前掲『神奈川県郷土資料集成』一〇)
- (14) 「滑稽富士詣」(仮名垣魯文、万延〜文久年間)、古典文庫、一九六一年。
- (15) 前掲「大道中膝栗毛」、三二五頁。
- (16) 前掲「雨降山乃記」
- (17) 前掲「月園翁旅日記上、雨降山の日記」
- (18) 「富士大道中記」(与兵衛、寛政元年)、東松山市立図書館所蔵。
- (19) 大山の周辺には、六番長谷寺、七番光明寺、八番星谷寺、鎌倉には一番杉本寺、三番安養院、四番長谷寺と、坂東三十三所観音霊場の札所が点在しており、坂東巡礼者で大山、江ノ島に訪れる人は非常に多かつたと考えられる。
- (20) 「富士・大道中雑記」(天保九年)、神奈川県立金沢文庫所蔵。
- (21) 「大山より江之嶋鎌倉金沢日記」(天保十五年)、神奈川県立公文書館所蔵。
- (22) 「大山参詣并小遣帳」(嘉永元年)、『与野市史』通史編上巻、一九八七年
- (23) 「大山江ノ島日記帳」(岡田門五郎、嘉永二年)、蕨市立図書館所蔵複写本。
- (24) 「富士日記」(池川春水、明和五年)、『日本庶民生活史料集成』三、三一書房、一九六九年
- (25) 菅根幸裕「近世の大山講と大山御師―上総国作田村の大山講史料を中心に―」(『山岳修験』一八、一九九六年)では、作田村吉原家からの大山参詣路を示しており、同家では往復とも江戸経由であり、上総国東部では、木更津や富津へ出ないで船橋より江戸に入るルートを取る例もあつたと思われる。
- (26) 「富士禅定道中日記」(鈴木松蔵、文政十一年)、『三和町史』資料編近世、一九九二年
- (27) 「富士山道中日記覚」(友治郎、嘉永六年)、『松江市史』史料編(一)、一九七一年
- (28) 「鎌倉記」(自住軒一器子、延宝八年)、『鎌倉市史』近世近代紀行地誌編、吉川弘文館、一九八五年、一一一頁。
- (29) 前掲「鎌倉記」、一一三頁
- (30) 前掲「鎌倉記」、一二一頁
- (31) 前掲「鎌倉記」、一二六頁
- (32) 前掲「鎌倉記」、一二九頁
- (33) 前掲「鎌倉記」、一三〇〜一頁

(34) 前掲「鎌倉記」、一三二頁

(35) 前掲「鎌倉記」、一三二頁

(36) 前掲「鎌倉記」、一三一頁

(37) 前掲「鎌倉記」、一三二頁

(38) 前掲「鎌倉記」、一三二頁

(39) 大住郡戸田村小塩家文書(一七)、神奈川県立公文書館所蔵。この他小塩家には、この資料番号(一七)の下書きと思われる(資料番号八)、(資料番号三二、但し後欠)が残されているが、これらの文書の間には、若干の記述の差異が見られる。また『厚木市史近世資料編2・村落1』(一九九三年、一五二―六頁)に収録されている神奈川県立文化資料館蔵の史料は、前記のいずれとも微妙に記述が違っており、別に存在すると思われるが、神奈川県立公文書館では確認できなかった。

(40) 土呂・塚本・飯田・宮ヶ谷塔(現大宮市)では、一四、五才のものが一人前だといって初山参りをしていた(『大宮市史』五民俗・文化財編、一九六九年、一八四頁)。高畑(現浦和市)では、男子は十五歳になれば大山へ登山し、これを初山と称した。初山をすませると、村の若い衆講にも加入することができ、他の代参講にも参加できた(『浦和市史』民俗編、一九八〇年、五八三頁)。その他にも現在の坂戸市、三郷市、岩槻市域でも初山参りが見られた。石神(現川口市)では初山の帰りに女郎屋に寄ることもあった(『川口市史』民俗編、一九八〇年、七八五頁)。現鳩ヶ谷市、東松山市、瑞穂町域などでは、鎌倉、江の島周遊をも兼ねた初山参りであった。また、明治・大正

期に千葉県の小糸川流域では、嫁入り前の娘たちは一度は家族と連れ立って大山参りをしていた(『君津市史』民俗編、一九九八年、三九四頁)。

(41) 「誹風柳多留十四編十五丁目」

(42) 「川柳評万句合安永八年義印六丁目」

(43) 「川柳評万句合天明五年智印七丁目」大天狗様とは、大山山頂の犬天狗社に祀られた神である。同じく山頂の石尊社に祀られていた石尊大権現と共に庶民の信仰を集め、夏山季のみ登拝が許されていた。大紋日は、五節句など遊廓で定められていた特別な日のことであり、遊女屋にとって稼ぎ時であった。つまり、大天狗様への参詣が可能な夏山祭礼中は、藤沢の遊女にとって、多くの揚げ代収入を見込める時期であったということを示しているのである。またここでは、大山への参詣者の精進落しの場を「藤沢」と明記した川柳が複数存在していることにも注目しておきたい。

(44) 前掲『滑稽富士詣』、四〇五頁。

(45) 三髯勝彦家文書(文書番号I、E、四二)、藤沢市文書館所蔵(『藤沢市史』二、一九七三年、九六六―七頁に収録)

(46) 平野雅道家文書(II、M、四)、藤沢市文書館所蔵。

(47) 平野出見旧蔵資料(文書類六八)、藤沢市文書館所蔵。

(48) 三髯勝彦家文書(I、M、四九)(前掲『藤沢市史』二、八〇三―四頁に収録)。註(45)の三髯家文書(I、E、四二)と同じく、高野修「相模大山講と藤沢」(『藤沢市史研究』一九、一九八六年、のち前掲『大山信仰』所収)、同

「大山詣の参詣路」(前掲『山岳修験』一八)などの論稿において、幾度か紹介されてきた史料であるが、その内容についてはまだ十分に吟味されていなかった。